

「鹿児島県の近現代」教育研究センター

近現代センター通信

第4号 2024年9月

—目次—

豊穰の奄美—研究と文化の継承— (丹羽謙治)	1	制作・キュレーション・批評 (太田純貴)	8
「豊穰の奄美」第2部 (梁川英俊)	2	中学生への体験講義・キャンパスツアーの 実施 (松田忠大)	9
国際シンポジウム「ヨーロッパ啓蒙思想と現代 文化」(藤内哲也)	3	令和5年度地域マネジメント教育研究 プロジェクト報告会 (日高優介)	10
トークイベント「#鹿児島県の女性 03」 (出口英樹)	4	令和6年地域マネジメントプロジェクト	11
トークイベント「#鹿児島県の女性」第4回 (丹羽謙治)	5	鹿児島市の墓地 (友野春久)	12
		五代友厚とモンブラン伯爵 (吉満庄司)	15
		寄贈資料・今後の予定	19

奄美群島日本復帰70周年記念シンポジウム

豊穰の奄美—研究と文化の継承—

「鹿児島県の近現代」教育研究センター センター長 丹羽 謙治

弊センターが設立されてから二回目の春を迎える令和6年3月23日、学習交流ホールで標記のシンポジウムを開催しました。設立から1年半が経過し、各種のイベント（秋と春のシンポジウム、地域シンポジウム、連続トークイベントなど）のサイクルも定まり、地域に根差した活動を通して少しずつセンターも認知されてきているようです。

今回は奄美群島日本復帰70周年を記念して奄美を取り上げました。昨年度の梁川英俊教授の地域マネジメントプログラムで実施されました奄美島唄（島唄の教室）の現状に関する調査・報告を聞いて非常に刺激的で学術的に重要なものであると認識しました。そこで、島唄をどのように継承していくのかという〈問い〉をシンポジウムの形で多くの方々と考えたいと思った次第です。また、センターの日高特任助教の発案で、奄美研究の過去、現在を検証して未来にまなざしを向ける場を作ることになりました。奄美研究を第一部（午前）とし、島唄を第二部（午後）として、両者に橋を架

ける形で、タイトルを「豊穰の奄美—研究と文化の継承—」と致しました。センターが今後、豊穰なる奄美の文化の研究に携わっていくことへの誓いと祈りを込めているとお考えいただければと思います。

第二部については梁川教授から詳しい報告がありますので、ここでは第一部について簡潔に報告します。沖永良部島ご出身の皆村武一先生にはご自身の経験を交えながら近代の奄美地域の政治・経済の苦難の歴史を振り返っていただきました。また、与論島ご出身の町泰樹先生には文化人類学・民俗学の立場から見た奄美の研究アプローチについて紹介いただきました。画期となる戦後二回にわたる九学会連合の大規模な奄美群島調査の意義やクライナー、山下欣一ら研究者の成果をお示しいただきました。

第一・二部を通してご登壇いただきました皆様、当日ご出席いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

2024年3月23日（土）13：30～16：45

「豊穰の奄美」第2部「21世紀の奄美島唄—伝統から何を受け継ぐか？」

法文学部人文学科多元地域文化コース 梁川 英俊

今では奄美の顔とも言える「島唄」だが、それを取り巻く事情は大きく変わっている。かつては集落ごとの口承が基本であった島唄の伝承は、現在では教室が中心となり、歌唱の場もステージに限られているのが現状である。本シンポジウムは、「21世紀の奄美島唄」をテーマに、「伝統というものの意味が大きく変容しつつある今、島唄の継承はどのように行われるべきか？ 島唄において残すべき伝統、受け継いでいくべき伝統とは何か？ また、変えていかねばならないことがあるとすれば何か？」という問いに対して、研究者と唄者が発表・考察を行うという趣旨のもとで開催された。

発表では、まず梁川が「島唄の新世紀—伝統から未来へ」と題して、奄美島唄の基本的な特徴を紹介し、伝承が教室中心になっている中で、いかにして島唄本来の伝統を継承に活かしていくかについて提言を行った。アンニ氏（鹿児島大学人文社会科学部地域政策科学専攻3年）は「舞台から見る奄美島唄の変遷」という発表で、島唄が舞台芸能化していく過程で起きた議論を辿りながら、それが現在のステージの工夫にどのように受け継がれているかを考察した。原田敬子氏（東京音楽大学教授）は「奄美島唄の継承に創造は必要か？」というタイトルで、島唄をベースにした創造的な作曲の試みの具体例について自作を中心に紹介した。コメンテーターの酒井正子氏（川村学園女子大学名誉教授）は各発表の内容に触れながら、現在の島唄の状況についてハンドアウト資料にもとづく補足的な説明を加えた。

最後の島唄ライブでは、初の兄妹での奄美民謡大賞受賞者となった里朋樹氏と歩寿

氏が、軽妙なトークを交えながら、「朝顔節」「くばぬ葉」「山と与路島」「くるだんど節」などの歌唱を披露した。島唄を歌い継いできた先輩唄者たちへのリスペクトと、時代に合った新しい島唄の伝統を創っていくという心意気が共に伝わるステージで、最後の「六調」における会場の手踊りの盛り上がりとも相まって、島唄が21世紀においても確実に歌い継がれていくという手ごたえを感じさせてくれた。



国際シンポジウム 「ヨーロッパ啓蒙思想と現代文化 —日本・アジアとの関係から—」

法文学部 教授 藤内 哲也

2024（令和6）年3月24日（日）14時より、本学郡元キャンパス法文学部棟1号館201講義室において、フィレンツェ大学との交流協定に基づく国際シンポジウム「ヨーロッパ啓蒙思想と現代文化——日本・アジアとの関係から——」を開催しました。当日はあいにくの雨模様でしたが、オンラインでの聴講を含め約60名の参加者を得ました。

まず、法文学部の藤内哲也教授（西洋史・イタリア史）より、明治以降の日本を含めた近現代社会の基盤をなす、さまざまな理論や制度を準備した18世紀ヨーロッパの啓蒙思想について、あらためて本シンポジウムで問い直す趣旨が説明されました。

続いて、フランスの思想家モンテスキューを中心とした18世紀ヨーロッパ思想史の専門家であるフィレンツェ大学のローランド・ミヌーティ教授による基調講演が行われました。ミヌーティ教授は、カントの「啓蒙とは何か」を出発点として、多くの研究者の見解を紹介しながら、現代世界の諸問題に対する解決策を見出すために、啓蒙思想の遺産と有効性について考える必要性を強調するとともに、人権や正義、自由、コスモポリタニズムなどの普遍的な価値体系を内包する啓蒙思想の最大の遺産として、当時の思想家たちによる自由で批判的な思考や研究方法を高く評価しました。また、啓蒙思想にはヨーロッパ中心主義的な態度がみられる一方、単なる異国趣味を超えたアジアの文化や宗教、社会に対する真摯な考察がなされ、相互作用が生じていることを指摘し、J・オスターハンメルという言葉を借りてそれを「インクルーシヴなヨーロッパ中心主義」と性格づけました。

このミヌーティ教授の基調講演を受け

て、法文学部の太田純貴准教授（メディア論・美学芸術学・美術史）から「知識人」概念の有効性、柴田健志教授（哲学・倫理学）から全体主義と比較して自発的な思考を促す啓蒙主義の意義、丹羽謙治教授（日本近世文学）より日本における「啓蒙」の受容など、それぞれの専門分野や問題関心に沿った多彩な視点からコメントがなされました。

また、会場の参加者からも多くの質問が寄せられ、啓蒙思想の意義や近現代世界における諸問題との関係性、日本におけるヨーロッパ思想の受容等をめぐって、ミヌーティ教授、コメンテーター、質問者の間で刺激的で白熱した議論が展開されました。



「鹿児島県の近現代」連続トークイベント
「鹿児島県の近現代」連続トークイベント「#鹿児島県の女性 03」実施報告
高等教育研究開発センター 准教授 出口 英樹

法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センターは、令和6年3月3日に種子島の西之表市民会館にて連続トークイベント「#鹿児島県の女性」の第03回を開催いたしました。テーマは「鹿児島県の女性と教育」です。当日は西之表市民の皆さまの他、八板俊輔西之表市長にもご参加いただきました。

鹿児島県には男尊女卑の風土が残っていると言われます。そのことが影響しているのか、今日においても、例えば女子の4年制大学進学率は鹿児島県が何年もずっと全国最下位という状況が続いています。「女の子だから大学に行かなくてもいい（むしろ行かないほうが幸せになれる）」、「お姉ちゃんは地元の短大で我慢して弟は東京の4年制大学に」というような話は今でも少なからず見聞されます。そして、そのような傾向はもしかしたら離島において顕著であるかもしれません。

このような鹿児島県の現状と筆者（話し手）の課題意識を踏まえ、桃の節句である3月3日に（それは半ばたまたまですが）種子島において「鹿児島県の女性と教育」について考えるイベントを開催しました。「鹿児島県の女性と教育」について、歴史的経緯を概観しながら、上記のような現在の女性と高等教育（=大学）について参加者とともに考えるようなセッションを目指しました。

このような鹿児島県における女子教育の言わば後進性に言及しつつ、「実は日本で最初の女子大生は鹿児島県の女性である」という話を紹介しました。戦前の学校教育制度において大学は基本的には男子だけのものでした。そのような時代背景があったにもかかわらず、鹿児島県出身の丹下梅子さん（1873年-1955年）をはじめ3人の女性が初的女子大学生として東北帝国大学（現在の

東北大学）に入学したのです（丹下さんはその後、アメリカに渡り博士号も取得します）。

つまり、鹿児島県には女子教育のポテンシャルが眠っているはずである、ということです。また、筆者らは「鹿児島県の近現代」教育研究センターの地域マネジメント事業プロジェクトの一環として種子島高等学校郷土研究部について調査していますが、その部員の多く（創部の頃は8割以上）が女子生徒であったことにも注目しました。

参加者からは自身の体験を踏まえたコメントや現状に対する提言などが寄せられ、少人数ながら大いに盛り上がりました。このイベントが種子島の皆さん、ひいては鹿児島県の女性と教育という問題を考える一助になれば幸甚です。



連続トークイベント「#鹿児島的女性」第4回

「丹下梅子を想う」

「鹿児島近現代」教育研究センター センター長 丹羽 謙治

令和6年3月9日に、第94回日本衛生学会学術総会 市民公開講座と重ねる形で、かごしま県民交流センターにおいて20分ほどの講演をおこなった。この学術総会は鹿児島大学医歯学総合研究科の堀内正久教授が統括責任者として開催されたもの。弊センターが設立されてから間もなく、堀内先生がセンターに来られ、学術総会の開催を行うので、ビタミンロードの選定、および市民講座への協力を依頼された。山形屋デパートの玄関前に胸像が、また鹿児島銀行本店の前に記念碑が建てられていることや、農学博士を取得した事実などは知っていたものの、丹下梅子の詳しい事績についてはほとんど知らないままにお引き受けをすることになった。令和5年(2023)は丹下梅子が大正2年(1913)東北帝国大学に入学を果たし、初の女子大生となってから110年に当たり、また明治6年(1873)生まれの梅子の生誕150年にも当たっていた。ちょうどセンター設立二年目にあたり、鹿児島の女性をテーマにした連続トークイベントを開催することになったため、ふたつのイベントを重ね合わせることにしたのである。

講演では、まず先行研究に依りながら梅子の生涯を概観した。鹿児島の金生町に、裕福な商人の家庭に生まれた梅子であったが、3才の時に事故で右眼を失明する。鹿児島県尋常師範学校を卒業後は、近所の名山小学校に奉職。前田正名の仲介で、日本女子大学校の1回生となり化学を専攻する。卒業後は東北帝国大学理科大学に入学、大学院を経て、米国への留学を果たし、ジョンズ・ホプキンス大学でPh.Dを取得。帰国後は、日本女子大学教授。昭和15年には東京帝国大学より農学博士の称号を授与された。

次に、梅子の鹿児島時代を振り返るべく、その家庭環境と社会環境について見ていった。梅子の父丹下伊左衛門は砂糖・塩の販売を手広く行う富裕の町人であるとともに、金生町ほか14町の戸長、鹿児島市初の収入役を務める人物であった。旧鹿児島城下の有力者といってよい。県都の中心部で近くには役所や学校なども整備され、地方の出身者と比較すると恵まれた環境の中にいたことがわかる。梅子の兄弟姉妹を見てみると、伊左衛門の長女じん、長男伊太郎、次男伊八郎の学歴は不明であるが、三男は慶応義塾に入り(若くして死去)、四男の丑之助は東京帝国大学を卒業の後、第七高等学校造士館の教授となる(明治36年、34才で死去)。梅子のすぐ上の姉(次女)花子は東京女子師範学校を卒業、日本女子大学国文科に入り、後に跡見女学校の舎監となる。彼女が梅子の精神的な支えとなったことはよく知られている。事業を継いだ兄を除けば、兄姉は東京に遊学しており、いずれも成績は優秀であった。ただし、家業が衰運に向かったために梅子は東京遊学を行う資力を得ることができなかったのか、教員に甘んじていたところ、親類の前田正名の支援により、明治34年(1901)成瀬仁蔵の日本女子大学校で学ぶことができたのである。

次に梅子の東北帝国大学入学について。女子の大学入学を認めることについては、澤柳政太郎(東北帝国大学初代総長、京都帝国大学総長)の方針が大きく関係してくる。大学入学資格には(1)高等学校卒業生、(2)高等専門学校卒業生のほか、(3)中等教員資格者があった。澤柳の新聞談話(鹿児島新聞、大正2年8月26日)を借りれば、「東

北大学の理科大学規則に依りて中等教員の資格を有する者は男女の區別なく一様に英語の試験を爲して入學を許可する事となり、入學後も同等の試験を経て卒業せば、共に學士號を稱し得る等、男女に同一の特權と待遇とを與へ、何等男子と懸隔を設けざるを以て、今回の女子入學に就て文部省も東北大學も豫定の事を決したるのみ、敢て驚くに足らざるなり」ということであつた。当時文部省も東北帝大が聴講生として彼女らの入學を認めるものとしていたらしいが、本科生として女子三人を認めることになったことについては世間からさまざまな議論が沸き起こり、反発も大きかつた。

当時の鹿児島新聞紙上で、熊本出身の教育者、嘉悦孝子は「帝國大學へ入學する婦人などは概ね婚期を過ぎた人が所謂新らしき女の新しき思想に驅られた人が入る所でせう。……女子大學を卒業した人すら方針に迷うと居るのに帝國大學を卒業した女子が將來何うなりませう。徒に世間の評判者になるのは厭(いや)ですから私としては女子の帝大入學は決して獎勵致しません」と述べ、女性は家庭に入るべしとの立場から帝大への女子の入學に反発する談話を寄せている。

鹿児島実業新聞に載つた澤柳政太郎の談話は次のようなものである。

「たとへ三女史の入學を羨ましく思ひ發奮大學入學の希望の者が出るにしても前述の次第で學力の足らぬ爲め途中で斷念するの已むを得ぬに至るであらう。夫れともう一つは一般の婦人は相當の年配となれば其大部分は家庭の主婦となつて一家の家政を適當に處理する場合には普通の學力さへあれば充分である専門の學問などは在つても不必要で却つて寶の持腐れとなる結果を生ずるから此の方面から見ると入學志望者の續出する事は多くあるまいと思ふ」。世間を刺激しないためか、三名の女子大生の誕

生を例外的に扱う論調が見て取れる。澤柳の本音なのか、あるいは新聞の取り上げ方の問題なのかは俄かに斷定できないが、かえつて初代の理系女子に対する風当りの強さが見て取れよう。

そうした世間のさまざまな意見に関係なく、梅子たちは己の進むべき研究に邁進したのであり、才能を努力によって磨き、花を咲かせることができた。才能と努力に加え、家族や親戚の支えと環境、恩師や支援者の援助とが三位一体となって、科学者丹下梅子を生み出したのである。

講演では、梅子の研究分野—ビタミン—のことにほとんど触れることができなかったが、丹下梅子という存在とその歩みが未來の後輩たちの“ビタミン”になることは間違いないだろう。

今回、慌てて講演の準備を行ったが、その中で気づいたことは、丹下梅子の業績を紹介し稱揚する著作の多くは、蟻川・宮崎両氏の著作に基づきそこからほとんど一步も出ていないものが多いということであつた。資料的な限界があることは間違いないが、丹下梅子が他人に成し得なかつた優れた業績を残すに至つた背景について各方面からの検討が必要であるように思われた。

参考文献

- 日高旺『女たちの薩摩』(春苑堂書店、1980年)
- 吉井和子『薩摩おごじょ 女たちの夜明け』(かごしま文庫⑦、春苑堂出版、1993年)
- 蟻川芳子／宮崎あかね共著『白梅のように—化学者 丹下ウメの軌跡』(化学工業日報社、2011年)
- 蟻川芳子監修／日本女子大学理学教育研究会編『女子理学教育をリードした女性科学者たち 黎明期・明治期後半からの軌跡』(日本女子大学叢書13、明石書店、2013年)

「鹿児島県の近現代」連続トークイベント

「#昭和99」

2025年(昭和100年)にあたる年です。これに先立ち、「#昭和99」と題したトークイベントを開催します。
このイベントでは、文学、歴史学、経済学、社会学などの視点から様々なテーマを取り扱います。
皆さんのお声も是非お聞かせください。

1 昭和6年
**「木脇藤次郎が
見た昭和」**
 丹羽謙治教授
 6月29日(土) | 15:00～
 天文館図書館

2 昭和20年前後
「知覧の戦中・戦後」
 伴野文亮特任准教授
 中嶋晋平特任助教
 八巻聡(知覧特攻平和会館)
 後援:南九州市
 8月11日(日) | 13:00～
 ミュージアム知覧

3 昭和後半
**「昭和の鹿児島:経済成長への
『開発』と人々の生活」**
 日高優介特任助教
 鹿児島市立図書館主催 鹿児島市立図書館講座②
 9月14日(土) | 14:00～
 鹿児島市立図書館
 要予約 鹿児島市立図書館 <https://lib.kagoshima-city.jp>

4 昭和21年
**「終戦直後の鹿児島と
奄美出身者」**
 中嶋晋平特任助教
 10月14日(月祝) | (予定)
 鹿児島県立図書館

5 **地域シンポジウム** 昭和全体
「沖永良部島の昭和」
 12月予定 | 沖永良部島
 (和泊会場・知名会場)

6 昭和全体
**「鹿児島が生んだミステリ評論家
中島河太郎」**
 鈴木優作特任助教
 共催:天文館図書館
 2025年1月18日(土) | 13:00～
 天文館図書館

令和6年春のシンポジウム「#昭和99」 2025年3月予定



お問い合わせ先

「鹿児島県の近現代」教育研究センター

TEL: 099-285-7532 E-mail: kingendajim@leh.kagoshima-u.ac.jp

詳細はこちら



「制作・キュレーション・批評」

(2024年2月8日@鹿児島大学ラーニング・コモンズ1) 報告

法文学部人文学科多元地域文化コース 准教授 太田 純貴

「地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト」の一環として、トークイベント「制作・キュレーション・批評」を開催した。開催の契機となったのは、熊本市現代美術館での《遠距離現在 Universal/Remote》展の開催(2023年10月7日~12月17日)である。これまでのイベントにもご協力をいただいていた鹿児島出身・在住の美術作家・木浦奈津子氏による同展覧会への作品の出展、熊本市現代美術館学芸員・坂本顕子氏の「地域とアートと教育」(2023年12月1日開催)への登壇、同展覧会を鑑賞した学生の存在などが重なったため、同展覧会を焦点に地域とアートの関わりについて意見交換できる場を設定した。

本イベントは前後半の二部構成で行われた。前半は木浦氏、木浦氏の活動を熟知し鹿児島で活動するインディペンデント・キュレーターの原田真紀氏、太田による話題提供を行った。後半では主に、学生と登壇者の意見交換を行った。

前半では、太田からは、《遠距離現在》展や批判としての批評について概略的に語られたのち、近年のメディア理論の見地——特に物質や労働と関わる見地——から同展覧会について話題が提供された。原田氏からは、Covid-19のパンデミック以前以後における展覧会やその開催形態の変動について話題が提供された。木浦氏からは制作(者)という見地から、出展の経緯、作品や展示配置の意図、キュレーションされる対象としてのアーティストといった点について話題が提供された。

後半では、小林陽太郎氏、緒方鳳人氏、志垣慶花氏(すべての地域社会コース)を

中心に、同展覧会の批判的解釈、同展覧会の鑑賞経験を踏まえつつ展覧会と理念に関する質疑や、地域とアートの関係を問うようなイベントの意義などについて知見交換を行った。最終的にはフロア全体で議論を行った。

本イベントは部分的に学生主体で進行や質疑を行なってもらったが、的確に対応していただいた。学生を主体としたイベント開催の可能性も強く感じさせる機会にもなったように思われる。

「鹿児島の近現代」教育センター 令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクト

無料/入退室自由

2/8 Thurs. 14:30-16:40

@鹿児島大学法文学部 ラーニングコモンズ1

制作・キュレーション・批評

14:30-15:30 話題提供

- ・木浦奈津子(画家)
- ・原田真紀(インディペンデント・キュレーター)
- ・太田純貴(鹿児島大学教員)

15:40-16:40 鹿大生からの応答

2023年の10-12月に熊本市現代美術館で「遠距離現在」と題した展覧会が開催されました(2024年には東京と広島に巡回予定)。今回のトークイベントの前半では、同展覧会の出展作家の一人である木浦奈津子氏、インディペンデント・キュレーターの原田真紀氏を迎え、同展覧会にも触れつつ、制作・キュレーション・批評という立場から、アートに関する話題を提供します。後半では、展覧会やアートに関して興味を持つ鹿大生から質問や感想を受けて、参加者全体で議論を行います。

また、2023年の10月から12月にかけて「アートと地域」を大枠としたトークイベントを、本学で3回に渡り開催しました。後半は3回のイベントを踏まえた総括的な質問や意見も、鹿大生からいただく予定です。

問い合わせ 鹿児島大学法文学部 太田純貴 | yota@leh.kagoshima-u.ac.jp
JSPS21K00123



中学生への体験講義・キャンパスツアーの実施

「鹿児島県の近現代」教育研究センター 副センター長 松田 忠大

「鹿児島県の近現代」教育研究センターは、鹿児島県の歴史、文化、自然などの地域資源を教育研究に活用し、その成果を地域に還元することを目的としている。この目的を達成するため、地域が有する資源のほか、鹿児島大学が有する様々な資源を小中高校における教育に活用してもらうための取組も進めている。

この取組の第一弾として、令和6年5月11日に、山脇学園中学校（東京都）の3年生、44名を受け入れ、生徒を対象とした2コマの体験講義とキャンパスツアーを実施した。同校の生徒たちは、本学に到着後、農学部長の寺岡行雄教授による「世界自然遺産屋久島の歴史と課題」というテーマでの講義につづき、大木公彦名誉教授による「鹿児島は自然科学の宝庫」というテーマでの講義を受講した。講義受講後には、本学郡元キャンパス内におけるキャンパスツアーに参加し、学内を歩きながら、およそ40分間、林園や総合研究博物館をはじめ本学の教育研究施設等を見学した。

キャンパスツアーの実施にあたっては、英国ロンドン市公認ガイドの資格を有する前園晃慶氏（ドイツ銀行コーポレートバンク本部事業法人営業部長）に、ルート設定等についてアドバイスをいただいた。また、前園氏、近現代センタースタッフのほか、法文学部の学生もキャンパスツアーのガイド役を務めた。

近現代センターでは、9月にも東京の中学校の修学旅行の受け入れを予定している。今後は、鹿児島県、鹿児島市など地方自治体と協力して、地域資源を活用した教育旅行への支援のほか、一般観光客向けの観光パッケージの開発にも取り組んでいく予定である。



令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会 「鹿児島県の近現代」教育研究センター 特任助教 日高 優介

令和6年5月25日、郡元キャンパス学習交流ホールにて「令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会」を開催いたしました。報告会では、昨年度助成された13件のプロジェクトの成果報告が行われました。

藤内哲也法文学部長による開会の挨拶に続き、第1部のポスターセッションでは、プロジェクト参加教員が来場者に直接プロジェクトの説明を行いました。活発な意見交換が行われ、教員同士の対話から新たな研究の種が見つかる場面もありました。

第2部では、下記4件のプロジェクトについて口頭報告が行われました。

- ・「地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト」太田純貴准教授（法文学系）
- ・「肝属川の水利をめぐる民俗知と川－人関係に関する調査研究」難波美芸講師（総合教育学系）
- ・「地域課題としての水俣病を通じた普遍的課題の異分野間共有と記録の継承」中川亜紀治助教（理学系）

・「旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト」小林善仁准教授（法文学系）

いずれの報告からも地域の課題へ真摯に向き合う姿勢がうかがえ、本年度のプロジェクトの成果と今後の課題について共有することができました。

振り返りでは、プロジェクトに参加した教員から学生の参加への期待や、広報・告知方法についての課題が挙げられました。これらの課題については、本年度積極的に取り組んでまいります。

閉会の挨拶では、丹羽謙治センター長より、令和5年度のプロジェクトは令和4年度と比較し、予算規模100万円のプロジェクトが採択されたことや、法文学部以外の所属者によるプロジェクトが採択されたことなど、進化が見られたと述べられ、令和6年度のプロジェクトへの更なる期待が語られました。

今年の報告会は、一般参加者の多さが印象的でした。地域マネジメントプロジェクトは、鹿児島大学の研究者による最先端の取り組みです。今後もより多くの方々にこの活動を知っていただけるよう努めてまいります。

最後に、本年3月にご退職されました前副センター長の西村知名誉教授に厚く御礼申し上げます。センター開所以来、地域マネジメントプロジェクトを支えてくださりありがとうございました。

報告書はこちらからご覧になれます。



令和6年度地域マネジメント教育研究プロジェクトの紹介

- ・奄美民謡の継承のネットワークに関する調査及び歴史的録音のデジタル化
梁川英俊（法文学部人文学科）
- ・奄美大島大和村における地域資源果樹の利用に関する学際的研究
香西直子（農学部農学科）、兼城糸絵（法文学部人文学科）
- ・地域と現代文化との関わりを発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト
太田純貴（法文学部人文学科）、菅野康太（法文学部人文学科）、
農中至（法文学部法経社会学科）、清水香（教育学部）
- ・旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト2024
小林善仁（法文学部人文学科）、南直子（法文学部人文学科）、永迫俊郎（教育学部）
- ・沖永良部における島妻慣行と女子教育の伝統：奄美群島及び沖縄離島との比較研究
中谷純江（総合教育機構グローバルセンター）、
中嶋晋平（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、先田光演（えらぶ郷土研究会）、
桂弘一（和泊町議会）
- ・鹿屋における〈水の記憶〉を未来に一水資源との豊かな共生を目指して—
難波美芸（総合教育機構グローバルセンター）、
伴野文亮（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、川西基博（教育学部）
- ・奄美群島の経済・社会課題解決に向けた歴史資料利活用プロジェクト
澤田成章（法文学部法経社会学科）、伴野文亮（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、
日高優介（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、鈴木優作（同左）、
金子満（法文学部法経社会学科）、安藤良祐（法文学部法経社会学科）、
三浦壮（法文学部法経社会学科）
- ・鹿児島の地域づくりに公民館が果たした役割の歴史的検証と現代への継承・発展—鹿児島県日置市を事例に—
酒井佑輔（法文学部法経社会学科）、農中至（法文学部法経社会学科）
- ・与論島からの「移民」についてのオーラルヒストリー研究：
森崎和江『与論を出た民の歴史』の「その後」
藤村一郎（総合教育機構キャリア形成支援センター）、
酒井佑輔（法文学部法経社会学科）
- ・シマ社会の新たな知の循環に向けた奄美の集合的記憶形成に資する字誌の利活用
農中至（法文学部法経社会学科）、高梨修（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、
小栗有子（法文学部法経社会学科）
- ・地域に生きる、歴史を生きる：高大生の歴史実践と協働型価値創造
石田智子（法文学部人文学科）、伴野文亮（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、
中嶋晋平（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、兼城糸絵（法文学部人文学科）、
松井敏也（筑波大学）、村野正景（静岡大学）
- ・「種子島研究」の探索とアーカイブ化による教材および教育方法の開発
出口英樹（高等教育研究開発センター）、伊藤奈賀子（高等教育研究開発センター）、
日高優介（「鹿児島の近現代」教育研究センター）、鈴木優作（同左）

- ・ 島嶼の伝統野菜の維持・保存と教育への活用
～伝統野菜と郷土の食文化を復活させる食育プログラムを通して～
一谷勝之（農学部農学科）、小栗有子（法文学部法経社会学科）、中野八伯（教育学部）、
山口幸彦（教育学部）

鹿児島市の墓地

「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 友野 春久

はじめに

鹿児島市の墓地は、旧藩時代より続いた寺院が、明治初期の廃仏毀釈によりことごとく廃寺となり、松原山南林寺などにみるように寺院の廻りに多くの墓が残されたので、これらの跡を墓地化しているところに特徴がある。代表的な廃寺跡墓地は、島津家歴代墓の福昌寺（池之上町）、浄光明寺（上竜尾町）のちの南洲墓地、興国寺（冷水町）、大徳寺（新照院町）、笑岳寺（常盤町）、寿国寺（武町）、正建寺（下荒田町）と南林寺（南林寺町）などである。鹿児島市は市街化が進むにつれ、昭和11年当時旧市域に点在していた295ヵ所（『鹿児島市史』2）の墓地の移転並びに集中化を促進し、市営として現在の大型墓地が形成されるに至った。区画数の多い順に示すと次のようになる。

草牟田墓地：9240区画、唐湊墓地：7449区画、坂元墓地：5528区画、郡元墓地：3980区画、興国寺墓地：3083区画、武岡墓地：2404区画、露重墓地：1014区画（『鹿児島市役所環境衛生課斎園係調べ』令和6年）、総計約32700区画になり、一区画に数基の墓が建てられている所もあった。しかしこのところ「墓じまい」が進み、いたるところに空き区画が目立つ。古い時期に開設された墓地ほどこの傾向がみられ、先祖の墓に詣でる方は実感されているだろう。墓は遺族が故人を偲んで後世まで残るよう建てたものである。碑文を刻し功績を刻んだ墓もみえるので、本稿ではこれら7墓地の成立過程と著名人墓、また旧南林寺墓地についても述べてみたい。なお、旧住所は平成元年1月現在を示す。

興国寺墓地（現住所：冷水町4番、旧住所：冷水町279）

大平山興国寺は曹洞宗福昌寺の末寺で島津11代忠昌、18代家久夫人持明院の菩提寺として明応5年（1496年）稲荷町に創建された。その後、永世5年（1508年）現在の城山町へ移され、慶長7年（1602年）この地に鶴丸城が築かれることになり、さらに現在地冷水町へ移された。明治初年廃仏毀釈で廃寺となりその後市が墓地を継承、納骨堂2ヶ所と17ヵ所ある市営墓地（令和6年現在）で最も古い明治43年10月5日開設になる。鹿児島市中心部に位置していた「南林寺墓地」の大正8年4月25日廃止に伴う、その移転先の一墓地として改修拡張され同年7月工事竣工、現在に至っている。墓地には苔むし風化した墓も多く、刻されている文字を読むのに苦労した思い出がある。中段から上段にかけて、長い年月のうちに土砂に埋もれ、また倒れて区画のわからない墓もあった。薩摩の歴史学者伊地知季安・季通、ブドウ王長澤 鼎、宝暦治水工事副奉行伊集院十蔵、薩摩藩家老新納中三など多くの先人の墓がある。面積は約2万4千㎡（約7千2百坪）あり、平成24年当時無縁墳墓とされる481基に、墓参管理のない墓の撤去告知の立て札が立っていた。現在は墓地内各所に纏められている。市管理人は坂元墓地に常駐している。

郡元墓地（現住所：郡元町9番、旧住所：郡元町1346）

郡元墓地は南林寺墓地廃止に伴う墓石移転先の一墓地で、当時の鹿児島郡中郡宇村を流

れる新川から紫原台地に至る斜面1万2千㎡(3600坪)に大正8年3月1日に新設された。昔は墓地入り口に石材店・花屋さん・牛舎があり、紫原へ登る道の中腹に防空壕が2つほどあったと記憶している。現在は入り口に市管理人室と墓地案内図が設置されている。河野主一郎・山口孝八郎通清など薩軍関係者、薩摩藩英国留学生の村橋久成類家、薩摩藩家老鎌田出雲正純、文化官僚木脇啓四郎、島津家の墓もある。宝暦治水薩摩義士徳田助右衛門墓は1等4号にあったが大阪府在住の子孫により2019年2月に墓じまいされた。無縁墳墓は3ヶ所に分けて纏められている。

坂元墓地(現住所：坂元町19番、旧住所：坂元町185)

鹿児島市の都市計画事業に伴い昭和11年8月29日、坂元に面積6万5千㎡(約2万坪)の市営墓地を開設した。この墓地には昭和24年から同37年にかけて池之上町・鼓川町・清水町・春日町など旧武家地と新照院の大徳寺墓地と上山墓地から移設を受け入れ、その際縁故者のない無縁仏4600柱の安置所も設置し、現在の大型墓地を形成している。他の墓地に比べ起伏が少なく掃苔し易い所であり、島津久光子孫家墓もある。大徳寺墓地に葬られていた絵師平山東岳(1834～1899)は、同墓地廃止当時無縁仏として坂元墓地安置所に保管されていたが、子孫が遺骨を錦江町田代へ移設している。無縁墳墓は伊敷台側の見晴らしの良い所に纏めてある。

草牟田墓地(現住所：草牟田1丁目30番、旧住所：同じ)

鶴丸城の地にあった島津13代忠隆と14代勝久の菩提寺を、慶長7年(1602年)草牟田に移し隆盛院とした。西峯山隆盛院は曹洞宗福昌寺の末寺になる。鹿児島市は大正元年8月21日草牟田の西斜面に墓地新設を起こし、同2年4月23日に面積7万㎡(2万1千坪)の広大な墓地が完成した(『鹿児島市史』2)。入り口に隆盛院時代から続く旧墓地が存在しており、市案内図には明治44年9月設置と書かれ、前掲興国寺墓地に続き古くに設置されている。少し登った所に大正9年から昭和3年にかけて、南林寺、上荒田町、能学寺、正建寺、下荒田町の各墓地から改葬の説明看板もある。新照院大徳寺墓地からも改葬され、太平洋戦争時空襲等による戦没者を含む縁故者のない無縁納骨堂6ヶ所と、墓地内の無縁墳墓を纏めた区域も下段から頂上にかけて設けられている。鹿児島県内最大規模で、初代県令大山綱良実父の墓、寺田屋事件弟子丸龍助貞行、台湾で日本語教育に従事した相良長綱、「大石兵六夢物語」を著した毛利正直ら薩摩藩士・歴代市長・軍人・商町人などの墓が多い。西南戦争の発火点となった陸軍火薬庫が置かれていた地である。最上段には民営墓地も併設されている。ここから岩崎谷に下っていくと、薩軍野戦病院跡・西郷隆盛終焉の地がある。

武岡墓地(現住所：武3丁目41番、旧住所：武町1156)

昭和42年から施工した「鹿児島市都市計画武・田上地区土地整理事業」により、昭和50年4月1日、武岡の高台に面積2万㎡(約6千坪)の墓地を新設し、西田3丁目から常盤町に至る笑岳寺墓地から墓石を移設して武岡墓地となった。笑岳寺は伊集院曹洞宗梅岳寺を本山とし、永禄12年(1569年)の創建。笑岳寺墓地は個人墓など約5千基あったものを、寄せ墓にして冒頭の区画数となる。墓地中央に由緒墓と無縁仏の安置所があり、薩摩琵琶の名手として知られる伴彦四郎の由緒墓もある。また移設後の無縁墳墓も纏められており、戦前に駐独大使・外相などを務めた東郷茂徳の父壽勝家墓がある。最上段に民営墓地も併設され、絵師平山東岳の実兄佐八郎(1826～1909)の墓もあったが近年移設されている。高圧電線鉄塔下に、表に「摩利支天」裏に「地域農民の家畜の墓」と刻された高さ1m程の石碑が建っている。理由は分からないがこの墓地は加納家の墓が多い。

武2丁目西郷屋敷跡西側山手の寿国寺墓地にあった島津家墓と宝塔は、昭和48年福昌寺墓地に移されている。

露重墓地（現住所：郡元町9番、旧住所：郡元町1291）

前掲郡元墓地と同じ大正8年3月1日に開設され両墓地は隣接している。「涙橋血戦之碑」側から登る急坂の一本道が上段まで続き、細い道で郡元墓地中段と繋がっている。新川沿いの最下段には川上家（私設）、松方正義父正恭、奈良原喜左衛門、橋口五葉家、大戦後奄美群島の武装解除・復員業務にあたった陸軍少将高田利貞、中段には中郡宇村村長を務めた堀金光、西南戦争で没した桂久武家の墓がある。下荒田町、鴨池町からの移設墓も多い。無縁墳墓は最下段と中段に纏められており、また郡元墓地との間に民間の「青年墓地」もある。大戦中は鹿児島海軍航空隊防備のために墓地南端に高角砲陣地が設けられていた。

唐湊墓地（現住所：唐湊2丁目19番、旧住所：田上町1039）

市は墓地新設の必要に迫られ昭和11年9月7日唐湊に、面積10万9千㎡（3万3千坪）の市営墓地を設けた。その後廻りにカトリック墓地と民営墓地も設置されたので、俯瞰するとさらに大きく感じる。区画は整然と整えられ、篤姫老女「幾島」の墓も昭和14年11月に他墓地より改葬されてきた。最上段に登ると無縁墳墓が並べられ、文久2年（1862年）寺田屋事件で没した鎮撫使道島五郎兵衛の墓もある。市内と桜島・霧島・大隅半島が眺望でき、北側の小高い山頂の高圧電線鉄塔下には摩利支天も存在する。

旧南林寺墓地

松原山南林寺は曹洞宗福昌寺の末寺で、「島津中興の祖」と呼ばれる島津15代貴久の菩提寺となり、弘治3年（1557年）福昌寺5世心巖和尚を開山に迎えた。藩主貴久の時に鉄砲伝来、ザビエルによるキリスト教伝来もあった。前述のように明治初年廃仏毀釈により廃寺となり、寺跡に島津貴久を祭神とする松原神社（松原町3-35）が明治3年創建される。旧墓地は清滝川の東側、現在の松原町から南林寺町一帯に広がり、面積は14万9千㎡（4万5千坪）、13万基の墓があったといわれる。第3代鹿児島市長有川貞壽は、市中心部の広大な墓地は市の発展を妨げると判断し、明治43年から移転先の墓地新設改修に着手した。市民・東京在住名士などから、先祖の墓を動かす事に強い反対もあったが、大正元年新埋葬は禁じられ、前掲3墓地の他に笑岳寺・浄光明寺にも改葬され同11年3月までに移転完了した。有川は大正2年11月に亡くなり事業完遂できなかったが、第5代市長山本徳次郎はこれを継承、墓石調査を大正8年5月19日、郷土史家池田米男・家村助太郎ら12名を調査委員に囑託し、その結果43基を南洲寺隣りに南林寺由緒墓として残した。墓地跡でのインフラ埋設工事、住宅建設などの際に今でも骨が出てくるといふ。

その他の墓地

南洲墓地（上竜尾町）には西郷隆盛ら薩軍戦没者755基3451名が刻まれ、明治16年にほぼ現況になっている。西郷家先祖墓は南林寺に23基あったものを、大正11年8月常盤町1065番地の菊次郎所有地へ改葬し現在に至る。西南戦争で没した政府軍将兵1270名は祇園之洲官修墳墓（清水町）に葬られ、明治42年の改修により整然と角柱墓が並んでいた。昭和30年に納骨堂に合葬、さらに祇園之洲公園整備に伴い同52年に慰霊塔が建てられた。鹿児島戦没者墓地（永吉3-12）は以前、陸軍墓地と呼ばれ日露戦争、済南・満州事変、日中戦争・第二次世界大戦で戦没した7万3千余名が祀られている。

五代友厚とモンブラン伯爵～パリ万博への出展計画を中心に～ 「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 吉満 庄司

はじめに

令和5年10月29日にかごしま県民交流センターで開催された「鹿児島の近現代」教育研究センター設立1周年記念シンポジウム「五代友厚と鹿児島〈鹿児島の近現代〉」において、渋沢栄一史料館の井上潤顧問が「近代日本社会の創始者渋沢栄一の思想と行動」という演題で基調講演をされた。井上氏は渋沢栄一の功績や思想について紹介され、渋沢栄一と五代友厚は「東の渋沢、西の五代」と称されることもあるが、二人の直接的な接点はほとんどないこと、渋沢は五代のことを批判的に評価していることについて触れられ、「この後のシンポジウムで、その謎が解明されることを期待しています。」と講演を締めくくられた。しかし、シンポジウムにおいてそのことについて全く触れられることはなかった。

そこで、小稿では「なぜ渋沢栄一は五代友厚のことを批判的に捉えていたか」ということについて検証したい。

パリ万博における渋沢栄一と五代友厚

渋沢栄一は旧幕臣で、五代友厚は倒幕勢力の中心となった旧薩摩藩士である。では、渋沢は旧薩摩藩士に対して全て批判的かということそうではない。例えば、幕末京都において西郷隆盛から豚飯をご馳走になったことなどを日記に記しており、懇意にしていたことが分かる。

では、なぜ五代友厚だけを批判的に捉えていたかということ、慶応2（1867）年にフランスで開催されたパリ万博において、薩摩藩に煮え湯を飲まされたことが極めて大きな要因であると思われる。渋沢は、将軍徳川慶喜の名代として派遣された徳川昭武の随員として、御勘定格陸軍附調役（会計係兼書記）という肩書きで参加し、一行の滞在中の経費削減に努め、博覧会出品物の売却等も行うなど手腕を発揮した。しかし、既に先乗りしていた薩摩藩は「薩摩琉球国勲章」に象徴されるような幕府と対等な独立国として振る舞い、幕府の権威は失墜し、当初予定していたフランスからの借款計画も白紙に戻された。

五代友厚自身はパリ万博には参加しておらず、フランスで直接渋沢らとやりあった訳ではない。しかし、薩摩藩がこのパリ万博に出展することを決めたのは、前年にフランス貴族モンブラン伯爵と契約を結んだ五代友厚であった。薩摩藩のパリ万博の使節団の団長は家老の岩下方平であるが、万博の準備は五代と契約を結んだモンブランが着々と進めていたのである。それゆえ、渋沢の悔しさの矛先は五代へと向けられたものと思われる。

五代友厚とモンブラン伯爵との交渉

慶応元（1865）年、薩摩藩は正使の新納久脩を団長とし、五代友厚、寺島宗則、そして通訳の堀孝之の4人に、町田久成が統括する14人の留学生を加えた総勢19人の使節団をイギリスに派遣した。いわゆる「薩摩藩英国留学生」である。薩摩藩の欧米への留学生派遣計画は島津斉彬が計画しており、実際に琉球に滞在中のフランス人に蒸気船の購入と合わせて留学生派遣の交渉を行っていたが、斉彬の急逝により計画は白紙に戻された。その後、薩英戦争を経て、五代が具体的なプランを立てて実行に至った。

イギリス到着後、五代は新納と堀の3人で、マンチェスターをはじめとするイギリス各地の工業地帯を回り、武器弾薬の購入に奔走した。さらに、紡績機械の購入と技師の派遣要

請を行い、その紡績機械をもとに慶応3（1867）年に集成館のあった磯地区に鹿児島紡績工場が創設され、我が国最初の近代機械紡績がスタートした。

一行がロンドン滞在中、フランス貴族のモンブラン伯爵が接触を図ってきた。なお、モンブランはベルギーにも領土と城を持っており、ベルギーにおいては男爵の爵位を持っていた。モンブランは日本への関心が高く、文久年間には来日を果たし、日本語や日本の文化について学びフランスの地理学会で日本に関する報告を行ったり、『日本事情』を著すなど日本通として知られていた。当初は幕府との接触を図り、元治元（1864）年と慶応元（1865）年の遣欧使節団に接触を試みたが全く相手にされなかった。そうした中、薩摩藩の使節団一行がイギリスに来ているという情報を得て接触を図ってきた。これに対し、五代らは興味を示し、モンブランの招待でベルギー・フランスへ渡った。

イギリスからドーバー海峡を渡りベルギーのオスタンド港に到着した五代、新納、堀の3人を出迎えたモンブランは、ベルギー南西部（フランスとの国境近く）にある居城インゲルムンスター城に招いて歓待した。同城は現存しているが、個人での維持管理は困難ということで地元のビール会社に売却されている。五代の記した「廻国日記」には、敷地内の杜に狩猟に連れて行ってもらったという記述もあり、当時は城の一带は広大な森で狩猟場になっていたことが窺えるが、現在は城の周囲だけが公園として残り、その他は一般の住宅地となっている。

五代らは、モンブランに連れられ首都ブリュッセルに赴き、ベルギー政府当局者の立ち会いのもと、「ベルギー商社」設立契約に関する協議を行った。その内容は、モンブランがベルギーを代表し、薩摩藩と合同で会社を作り、薩摩藩内の鉱山資源を開発し、製造機械や武器を作る。生糸や茶の増産を図りヨーロッパとの貿易を促進する。利益は双方の出

資額により配分する。薩摩藩が軍艦や大砲を購入するときは同社を通して注文することなどが定められていた。「ベルギー商社」の設立は、まさに五代の持論である外国貿易を基調とする富国強兵策を具現化したものであった。同社の設立については、五代らが仮契約を済ませ帰国した後、藩内でも肯定的な意見が多く実現に向けて進むかと思われたが、親英政策をとる薩摩藩の方針に合わず、結局設立には至らなかった。

五代らがモンブランとの間で取り交わしたもう一つの重要な案件が、翌年フランスで開催されるパリ万博への出展である。モンブランから、万博とは国家の威厳を示す一大イベントであり、当時の日本の状況を踏まえたとき、薩摩藩の存在を世界にアピールする絶好のチャンスであることを教示された。そして巨大な見本市として、薩摩藩が今後ヨーロッパと貿易を展開することになった時、特産品を売り込む絶好のチャンスであるとアドバイスされた。実際、このとき出展した薩摩焼は、その後ヨーロッパで大人気となり大量に輸



インゲルムンスター城（ベルギー）



新納・五代・堀らの写真（モンブラン家蔵）

出されることとなった。

パリ万博における薩摩藩と幕府

慶応3（1867）年の第2回パリ万博は、ナポレオン3世の第2帝政の最盛期に行われ、世界中から900万人の観衆を集めた。会場はパリの中心部を流れるセヌ川河畔のシャン・ド・マルス（練兵所）が充てられ、広大な敷地の中央に間口370メートル、奥行482メートル、面積14,600平方メートルの巨大な楕円形をした主会場（産業館）が建設された。周囲には異国情緒を醸し出す個性豊かな諸国のパビリオンが幾棟も作られた。なお、この場所に万博のシンボルとしてエッフェル塔が建てられるのは、明治22（1889）年の第3回パリ万博の時である。

フランスの駐日公使レオン・ロッシュから出展要請を受けた幕府は、当初乗り気ではなかった。しかし、すでに薩摩藩が独自に出展するという情報が入ると、将軍名代の徳川明部大輔昭武（15代将軍慶喜の弟）を全権に、外国奉行でフランス駐劄大使に任じられた向山一履以下24名からなる使節団を派遣し、約4万7200両の費用を使って集めた日本の特産品を出品し、日本とその文化を紹介した。

薩摩藩は、薩摩焼や薩摩切子といった薩摩の産物に加え、泡盛や砂糖といった琉球の産物等を出品した。使節団のメンバーは、使節兼博覧会御用として家老の岩下方平、側役格として市来政清、博覧会担当として野村盛秀、渋谷彦助、岩下方美（清之丞）、蓑田新平、これに通訳の堀孝之、大工の鳥丸啓助、モンブランの秘書の斎藤健次郎、留学のため同行した岩下方平の長男の岩下長十郎の10名で、その他にイギリス人ハリソンとホームが同行した。なお、通訳の堀は途中香港までで、フランスには渡っていない。

『鹿児島県史』には、「随員には野村盛秀、渋谷彦助、岩下清之丞、蓑田新平、白川健次郎、堀孝之、大工鳥丸啓助、英人ハリソン、同ホーム、留学生岩下方美（方平の男、長十郎）が加わり」とあり、岩下清之丞と方美を別人として扱い、方美と長十郎を同一人物と誤認しているので、訂正しておきたい。なお、方美は方平の親戚で、方平よりも年配なので、使節団を率いた若き家老岩下方平にとって方美の存在は心強かったことであろう。

幕府の使節団よりも2か月以上早くフランスに到着した一行は、さっそくモンブランを薩摩藩の代理人として正式に博覧会の委員長に任命し、綿密な打合せを行った。まず、博覧会総裁宛に「薩摩侯は日本の大諸侯たると同時に兼ねて琉球国王でもある。薩摩侯としては幕府の下にあるも琉球国と王としては幕府から独立した君主である」との書面を提出し、薩摩藩の地位をアピールした。黎明館が所蔵する「玉里島津家資料」の中に、岩下方平がパリから国元の家老小松帯刀に万博の準備の進み具合を報告した書簡が存在するが、その便箋は特注で「AMBASSADE de S.M.le Roi des Liou Kiou」（琉球国王陛下の外交使節団）というレターヘッドが印刷されている。この特注の便箋使用もモンブランのアドバイスと推測され、管見の限りではこの1通のみだが、おそらく相当な数が印刷され公的な機関宛ての書簡もこれが使われたものと思われる。

薩摩藩は、幕府とは別に万博にエントリーし、会場内に独自の陳列場（パビリオン）を確保し、丸に十字の島津家の家紋を掲げた。さらに、開会式にも琉球王国の使節として式典に参列した。幕府をないがしろにしたこの行為は、国体にもかかる重大事件として幕府使節団としても黙認できず、日本出品取扱委員長のジャン・レセップス立ち会いのもと談判に臨んだ。幕府側は、支配組頭の田辺太一と通訳山内文次郎が出席し、薩摩側は岩下方平、市来政清とモンブランの3人が出席した。田辺は、薩摩の掲額に日本という文字がない

こと、出品目録に「琉球国王陛下松平修理太夫源茂久」とあること、開会式に薩摩の代表が琉球国王の使節名義で参列したことなどを詰問した。岩下は、「自分は何も知らない。万事、モンブランが一手に引き受けてしたことで、当方はあずかり知らぬこと」とかわした。双方の激しいやりとりの結果、幕府の出品物は「Gouvernement du Taikoun」（大君政府）とし、薩摩側は「Gouvernement du Taischiou du Satsouma」（薩摩太守政府）という表記にすることとし、双方とも日の丸の下に記すことで決着をみた。しかし、翌日の新聞各社は「日本はプロシアのような連邦制をとっており、大君（将軍）はその中の有力な一王侯に過ぎず、薩摩太守などと同じように独立した領主である。したがって、大君といえども大名と同格ではないか」という論調の記事を一斉に掲載し、幕府の威厳は著しく失墜した。田辺はこの件で責任を取らされ本国に召還され、向山も公使の職を解かれることとなった。

この情報を新聞各社に流したのは他ならぬモンブランであった。その他にも、幕府が出品した「武者人形」や芸者が日本茶などを提供して人気を博した「日本茶屋」が新聞で紹介された際には、いずれも丸に十字の大きなエンブレムが置かれているが、これもモンブランによるマスコミ戦略であった。また、「日本は万世一系の天皇を君主として、将軍は諸大名と等しく天皇から官職を授かっているに過ぎない」といった日本の国情を解説した自著『日本事情』を、万博会期中に関係者に頒布してプロパガンダに努めた。

さらに、薩摩藩は万博会期中に「薩摩琉球国勲章」という日本最初の勲章を作成し、フランスの高官や各国の代表に贈り、あたかも薩摩藩は幕府から独立した国家であるかのような印象を与えた。これは、当時「勲章」というという概念のない日本人の発想ではなく、モンブランの発案によるものだった。そもそも、勲章を制定して功績のある者に贈るという行為は、国家であって初めて可能となるものである。すなわち、薩摩藩が日本連邦の中できちんと主権を持った独立国であることを、目に見える形で立証したことになる。



薩摩琉球国勲章（尚古集成館蔵）

この時期、幕府はフランスとの提携を深め、横須賀製鉄所の建設費や軍制改革にかかる費用600万ドルの借款をフランスに依頼していた。しかし、パリ万博における薩摩藩の外交戦略によって、将軍が日本における唯一の主権者、幕府が日

本における正統政府であるという前提が崩れたため、借款契約は白紙に戻され。薩摩藩と幕府のパリを舞台とした攻防は、単に外交面にとどまらず、経済面でも幕府に大きな衝撃を与え、国内の政局にも大きな影響を与えることとなったのである。

パリ万博における薩摩藩のやり方を目の当たりにした幕府の使節団は憤慨し、特に会計担当の渋沢栄一はやるせない怒りを覚えたことだろう。具体的な戦略はモンブランの発案で進められたが、パリ万博で薩摩藩が何をアピールするかという大きな枠組みは、すでに前年に五代友厚との間で取り交わされていたのである。

渋沢はパリ万博で味わった屈辱がトラウマとなり、それを画策した五代に対する批判的な姿勢をその後も引きずっていったと思われる。明治になって両者が様々な場面で接触があればそうした感情が氷解する可能性もあったろうが、それぞれの活躍の場が東京と大阪と分かれていたことや、五代が若くして亡くなったことによりそれも叶わなかった。

寄贈資料

『熊毛文学』第1～108号、熊毛文学会（2024年2月5日、鮫島洋二郎様より）
伊藤昭弘『低平地研究会 歴史・文化専門部会史料集—蓮池藩日記にみる江戸時代の風水害』低平地研究会 歴史・文化専門部会（2024年4月2日、佐賀大学地域学歴史文化研究センター様より）
藤民央『南島古潭』郁朋社（2024年7月2日、茂野洋一様より）
藤民央『重野安繹伝—幕末・明治、二つの時代を生きた—漢学者の生涯—』鳥影社（2024年7月2日、茂野洋一様より）
茂野幽考『奄美染織工』鳥影社（2024年7月2日、茂野洋一様より）

今後の予定

令和6年度の連続トークイベント「# 昭和99」を各地で行っています。また、センターによるブックレットが10月に刊行されます。11月4日には、秋のシンポジウム「〈危機〉の時代における海外へのまなざし—明治と現代、そして鹿児島—」を開催します。

近現代センター通信 第4号

2024年9月1日

発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

〒890-0065

鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21-30

電話 099-285-7532

メール kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp

<https://kadai-kingendai.jp/>



撮影 平岡正三郎氏

〈第4回〉「鹿児島県の近現代」連続トークイベント 「#昭和99」

終戦直後の鹿児島と 奄美出身者

戦後の鹿児島のこと、語り継ぎませんか？

2024年

10月14日(月祝)

14時～16時(開場：13時30分)

場 所 鹿児島県立図書館（第1研修室）

※駐車場は利用できません。公共交通機関
でお越しください。

参加費 無料

どなたでもご参加いただけます

講 演 吉見文一 (戦争を語り継ぐ遺児の会・代表)

話題提起 中嶋晋平 (鹿児島大学・特任助教)

主催 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター

お問い合わせ 鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島県の近現代」教育研究センター
☎ 099-285-7532 ✉ kingendajim@leh.kagoshima-u.ac.jp

